

急性期病院の現場から考えるACP

「もしもノートはこだて」  
思いの先に広がる医療へ

市立函館病院 入退院支援課 熊倉

# 本日のお話

---

1. 急性期病院の現状とは
2. ACPにおけるレディネス（準備段階）とは
3. 「もしもノートはこだて」活用のサイン
4. ACP視点で考える「はこだて医療・介護連携サマリー」
5. まとめ

# 日常と非日常の境界線

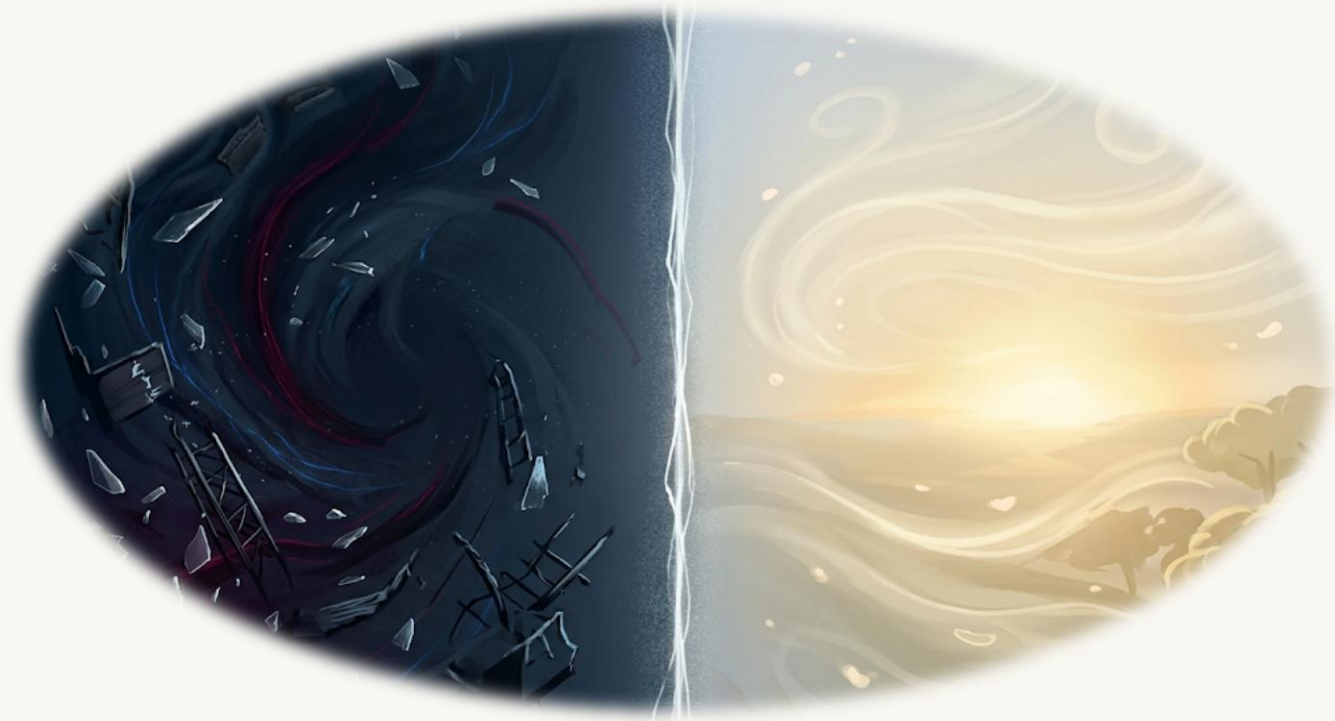
---

皆さんが日々支えているのは患者さんの「日常」。

私たちが急性期病院でお会いするのは、  
それが断ち切られた「非日常」の瞬間です。

今日は、その「日常」と「非日常」との間に、  
皆様と一緒に

「患者さんの生き方を繋ぐには」  
について考えたいと思います。



# 時間切れの決断

---

急性期病院の現場は、常に「待ったなしの医療」です。

救急搬送時、ご本人やご家族の気持ちが追いつかないまま、わずか数時間で**命の選択**が迫られます。

究極の選択を迫るなか、平時からの思いの共有がないと、ご家族に「自分の判断でよかったのか」という重い自責の念を残してしまう過酷な現実があります。



# ACPの捉え方：「死に方」ではなく「どう生きるか」

## ✕ 死に方の決定

ACPは、単に「延命するか・しないか」という最期の点（死に方）を決める同意書ではありません。

医療的なメリット・デメリットだけの判断に陥りがちです。

## ✔ 生き方のロードマップ

どんな状態を「自分らしく生きている」と捉えるか。その価値観を変化（迷いや揺らぎ）に寄り添いながら事前に共有しておくためのプロセスです。

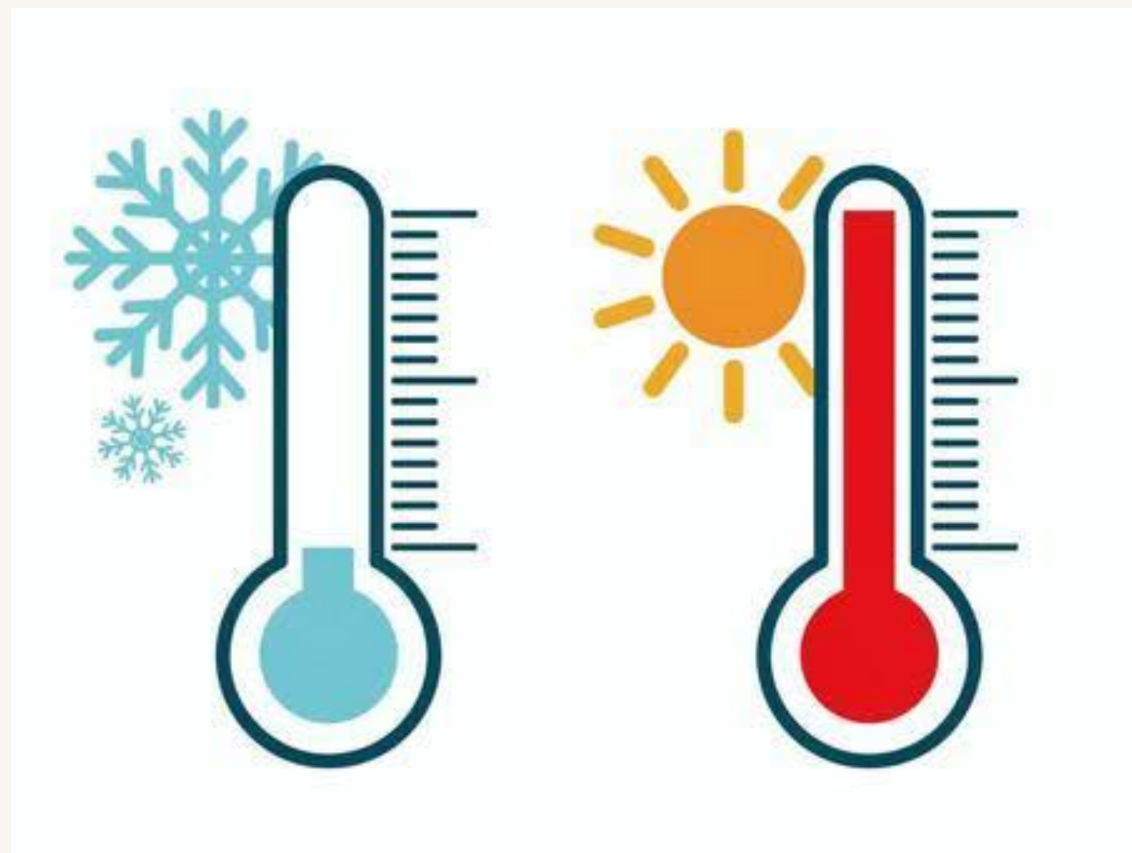
このロードマップがあることで、初めて「生きるための医療」が選択できます。

# ACPは「タイミング」がすべて

---

心の温度（レディネス）を測る

- 医師からの病状説明時は、価値観や不安を共有し、今後の目標を考える良い機会です。
- しかし、患者さんのおかれた状況によっては、話し合い自体が大きな負担になることもあります。
- だからこそ、無理に進めるのではなく、まずは話し合いへの「準備の温度（レディネス）」を測ることが第一歩となります。



# レディネスの階段と「待つ」支援



## 無関心期 / 関心期

「先生の話聞くのがつらい」など、現実逃避や否認をしている状態。この段階では無理に話し合いを進めず、今の温度に合わせた声かけをしながら待ちます。



## 準備期

少し先の不安を口にしたり、ご自身の思いを断片的に語り始める段階。日常会話から少しずつ価値観の種を拾い集める重要な時期です。



## 実行期

具体的な希望を持ち、家族や医療チームと思いを共有する段階。ここで初めて、もしもノートや応用ツールが活用され「記録」として機能し始めます。

# 急性期という「強烈なきっかけ」

---



## 地域へのバトンタッチ

急性期での急変や入院は、患者さんご自身のレディネスが一気に高まるタイミングです。

しかし、病院にはゆっくりと語り合う時間がなく、患者さんは病状コントロールができたばかりで心の余裕がありません。

だからこそ、退院後、地域に戻ったタイミングで、皆様が「あの時、どう思いましたか？」と拾い上げてくださることが最大の支援になります。

# 「もしもノートはこだて」の目的

## ×設問を埋めるためのドリルではありません

「ノートの全項目を埋めさせなきゃ」というプレッシャーは不要です。レディネスの階段を無理やり上げるための強制ツールにはしないことが大切です。

## ○思いを受け止める「器」です

心の準備が整った時、あるいはふとした瞬間に、ご本人の大切な思いを受け止めるための優しい器として活用してください。

# もしもノート はこだて -人生会議の説明書-

もしも、突然事故にあったら．．．  
もしも、重い病気になったら．．．

将来、自分で自分のことを決められなくなるかも知れません。そんな『もしも』の時に備えて、今のあなたの思いや願いを整理してみましょう。

「もしもノートはこだて」は、あなたが大切にしていることや人生の最期に望むことを、ご家族や医療・介護支援者と話し合う「人生会議」についての説明書になっています。

最期の瞬間まで「あなたらしく」生きるために、ご自分の思い、願いについてご家族や医療・介護支援者と話し合ってみませんか。



# ふとした瞬間に現れる 日常の会話に潜む「生き方」のサイン

「家族の負担にならないようにしたい」

「これだけはやっておきたい」

「この病気になってなかったら・・・」

「もう十分生きたから自然でいいんです」

「管に繋がりながら死にたくない」

「自分でできなくなってまで、長く生きたくない」

かしこまってノートを開かなくても、  
日々の何気ない会話の中にACPの種がたくさん散りばめられています。

# ACP視点で考える

## はこだて医療・介護連携サマリーの「2つの役割」

---

### 基本ツール

- 疾患名、要介護度、ADLなどの客観的な情報。
- 私たちが安全な医療を提供するための、絶対に欠かせない必須の情報です。

### 応用ツール⑱

- 本人の意向を尊重した意思決定支援のための情報。
- 数ある医療のルートから、ご本人の生き方に合った目的地を示す「羅針盤」となります。

# 全人的情報が連携できるツールへ



医療の自己選択



主観的・生き方の情報  
(応用ツール⑱)



医学的・客観的な情報(基本ツール)

客観的情報だけでは、医学的なメリット・デメリット  
でしか医療やケアを選べません。

皆様から「**主観的な生き方の情報**」が届けば、その人  
らしさを守るための医療を選択でき、究極の場面でも  
自己選択が極限まで守られます。

# 応用ツール⑱

## 「9. 確認できた思い」

今日、一番のお願いです。

もしもノートが完成していなくても構いません。

日々の訪問でポロリとこぼれた本音（主観的な情報）を、ぜひこの「9. 会話等から確認できた本人の思いなど」の欄に、1行でも残して急性期病院へ繋いでください。

その1行が、病院のベッドの上で患者さんの尊厳を守ります。

記載日 令和 年 月 日

はこだて医療・介護連携サマリー

応用ツール⑱ 本人の意向を尊重した意思決定支援のための情報

※本応用ツールはご本人の思いをつなぐための書式としてご活用ください。

下配は 時点 で確認できている情報です。今後も意向は変化していく可能性があります。適宜、対話を繰り返してくださいようお願いいたします。

ACP 人生会議

1.氏 名 生年月日 年齢 125 歳

2.意思確認実施機関 意思確認者（相談員等）

3.意思確認対象者 ☐ 本人 ☐ 家族や友人等：（氏名） による推定意思の確認

※ACP実施の有無にかかわらず会話等により聞き取れた本人の思いがある場合も下記に記入。

4.ACPを実施する上で参考にしたツール ☐ もしもノートはこだて ☐ 機関独自のツール（ ）  
☐ なし ☐ その他（ ）

5.もし生きることができている時間としたり、大切にしたいこと（複数回答あり）  
☐ 家族 ☐ 友人 ☐ 仕事や社会的な役割 ☐ 趣味  
☐ 身の回りのことが自分でできること ☐ 経済的なこと  
☐ できる限りの治療が受けられること ☐ ひとりの時間がもてること  
☐ 家族の負担にならないこと  
☐ その他（ ）

6.もし自分の意思をはっきりと示せなくなり、生きることができている時間としたり、希望する医療・ケア  
☐ 身体に大きな負担がかかっても、できる限り長く生きられる治療  
☐ 身体に大きな負担がかかる処置は希望しないが、そのうえで少しでも長く生きられる治療  
☐ 延命的な治療はおこなわず、できる限り苦痛を緩和して自分らしい時間を過ごすこと  
☐ 今はわかりません  
☐ その他（ ）

7.人生の最期を過ごしたいと希望する場所  
☐ 自宅 ☐ 今まで治療を受けていた病院（医療機関）  
☐ ホスピスや緩和ケアを中心に行っている病院（医療機関）  
☐ 老人ホーム、介護施設など  
☐ 今はわかりません  
☐ その他（ ）

8.自分の意思が示せなくなったとき本人が望む医療・ケアを推定できる人はいるか？  
☐ いる ☐ いない  
\*「いる」の場合  
☐ 家族 ☐ 友人 ☐ その他（ ）  
※本人の思いを推定できる人が家族・友人以外の場合、その他にご記入。  
ご本人が信頼を寄せ人生の最終段階を支える存在であれば、家族や友人以外でも構いません。例え医療・介護等の支援者がここにあたる場合もあるかもしれません。

9.会話等から確認できた本人の思いなど

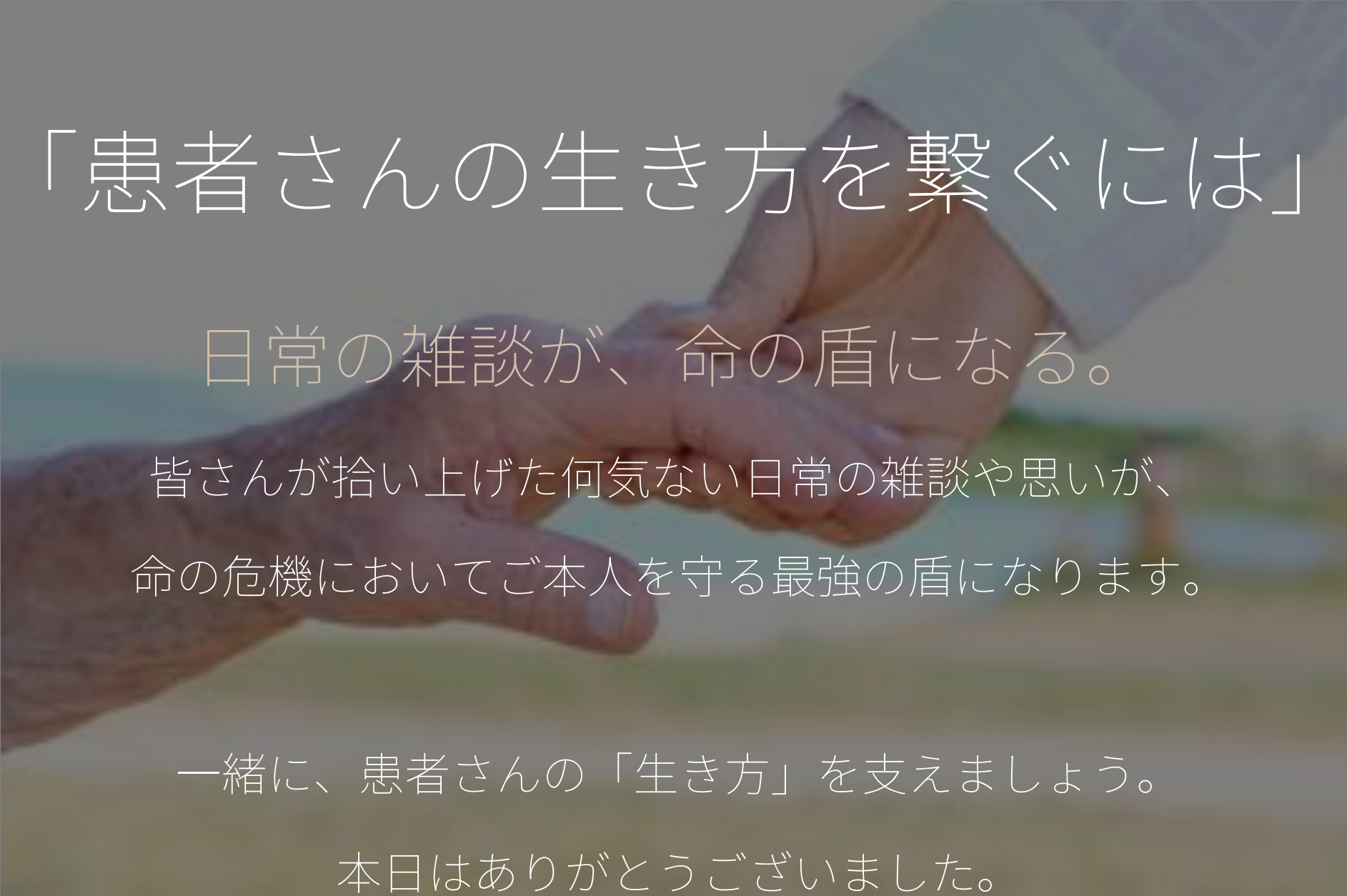
※これまでの項目について、特記事項等がある場合は応用ツール⑱をご活用ください。

各機関で独自のACPの取り組みを行っている場合は、そちらを実施の上、情報共有シートとしてご活用ください。独自の仕組みがない機関では、厚生労働省が作成している「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」および、その「解説編」を確認の上、ACPの取り組みの一つとして、両館市医療・介護連携支援センターのホームページにて紹介している「もしもノートはこだて」を参考に実施をご検討ください。

作成者 所属 記入者

ツール管理者 所属 氏名

はこだて医療・介護連携サマリー【応用ツール⑱】本人の意向を尊重した意思決定支援のための情報



「患者さんの生き方を繋ぐには」

日常の雑談が、命の盾になる。

皆さんが拾い上げた何気ない日常の雑談や思いが、  
命の危機においてご本人を守る最強の盾になります。

一緒に、患者さんの「生き方」を支えましょう。

本日はありがとうございました。